英会話 事始め

2024 年 10 月 31 日　前川　宗久(元・三菱電機)

　私の一日は諸々の朝のルーチンから始まる。
中でも英会話テキスト復習はボケ封じの妙薬と信じて疑わない。それはまず、便座に腰かけてからスタート。パンツおろしてリラックスムードの中で「起きてから寝るまで　英会話表現 550」の文例を毎日 3 ページ分、英訳・発声する。そのうち、便意も高じてきてお腹も頭もお声もスッキリしながらトイレを出る。それからリビングに戻って回し読んでいる３種類の英会話テキストの例文を２～３ページ分ずつ復習している。

　参考までに毎日の繰り返しテキストを次にリストアップする。

①起きてから寝るまで　英会話表現 550
②会話を途切らせない！　おたすけ表現 117
③英会話　スーパーイディオム 116
④ネイティブが好んで使う頻出表現 387

合わせて 1070 文例を、①は毎日繰り返し、②～③は 1.5 から 2 カ月で循環させている。①はすでに 9 年間で 49 回読み返して表紙はボロボロ。おかげで 1070 の会話文はいつでも直ぐに口から発することができる。英会話力というより脳みそへ刷り込まれたことの条件反射力だろう。それでも、なにか英語で喋らなくてはいけないときに、これらを頭の中で組み立てながらトツトツとはこなせる雰囲気にはなってきた。

　さて、①～④のテキストは 2015 年にウチの奥様が遺してくれたものだ。多才な奥様はＴＯＥＩＣ860 点・英検準一級・カナダＢＣ州の大学で英語教授法マスターのお方、さらに次女はＴＯＥＩＣほぼ満点。翻って私は現役時代、管理職条件に課せられたＴＯＥＩＣ受験で 560 点の体たらく。といって何ら家庭生活に支障はなかった。
　・・・が、2015 年にテキストと共に遺されたとき、「君の前向きで挑戦的な精神と行動力に少しで近づく」ことを衝動的に誓ってしまったのが英会話学習ルーチンのはじまり。彼女との英会話力ギャップを１ｍｍでも埋めつつ、まずは彼女のように海外一人旅にチャレンジすることを当面の目標とした。

　年金生活のゲルピンで教室には通えず、執拗なテキストリピートによる独学での高楊枝。
その年なんとかスイス・マッターホルン挑戦の一人旅を敢行したが、スイスは名にし負う多言語国家、現地でアサインした山岳ガイド達はフランス語やドイツ語を母国語とする輩ばかりで、岩稜にザイルで繋がれながらの命がけの会話が何とか成立したので、今ここに無事いる。しかし道中の、数あったトラブルではさすがに英会話コミュニケーション力の不足に幾度も情けない思いをした。

　その後は、趣味のテニスでフィリピン人に数年コーチをしてもらう中、互いに無理して、先方は怪しげな日本語、こちらはブロークンな英語という外から見て笑ってしまう対話が、生の英会話に触れる一つの機会となった。

　長女が再婚したときは、ハワイでウェディングフォトをとるのに同行。入国から滞在中の色んな場面で長女家族をそれなりに英語サポートする機会があり、そこでは孫や参列した外大出身同士の次女夫妻からも「ヘェ～！！」の反応得たのは嬉しいものの、それは単に「あの爺いのオヤジが」の「意外性」に他ならない。
まあ、ハワイでは、下手な英語より日本語の方がよく通じるので助かったというのが本音だ。

そして、今年 2024 年、満を持して「ロンドン・パリ一人旅」に。テニスの聖地・ウインブルドンでそのコートと名選手の足跡に触れること、そして油絵という共通の趣味で知り会った奥様の散骨含め、ロンドン・パリの美術館・博物館を歩き倒すことが目的だった。
有難いことに英国人と結婚しロンドン郊外に住む友人女性のお宅に泊めていただけることも弾みとなった。

ウインブルドンと言えばテニス４大大会、パリと言えばオリンピック 2024。但し旅したのが６月初旬だったため、ウインブルドンでは大会直前の芝生の具合、パリでは五輪準備のチェックとなったが十分に所期目的は達成。
とはいえ、この一人旅での一番の喜びは友人ご家族の温かいおもてなし、現地一般家庭のローカルライフに触れたことか。仰々しいイベントや派手な観光地より、こうした普段の住生活にタップリ浸ることから相互の文化理解が始まると痛感した。

ロンドン・パリでの一人旅では、ウオーキングに電車・バス、そして食事は道端テラスで喫食と、超円安貧乏旅に徹したため、行き当たりばったりでの「Ｑ＆Ａ」の繰り返しがコミュニケーションの大半。ここまでの英会話独習の成果がなんとか奏功し、右往左往するなかでも大過なく所期の旅程を果たせた。しかし、道すがら出会う人とじっくり語り合うということは、やはリスニングが「〇§△■∂Д※？？」でタイムリなレスポンスにも欠ける実力では困難。結局のところ、夢見るような双方向での英会話ダイアログには至らなかった。

では、大いに満喫したロンドン郊外の友人ファミリーとはどうであったか？　そこには現地で育ってる紅毛碧眼の 10 歳・12 歳のロウティーンガールズもいたのに・・。　けれども有難いことに友人夫婦は北海道大学で知り合った仲。子供たちは毎週日本語学校に通っており、パパとは英語・ママとは日本語でというバイリンガル家庭だったので、英会話ストレスは一切なしの天国。だから今回一人旅のハイライトとなった次第だ。
（写真：友人家族と団欒）

２０１５年以降の、「英会話」を切り口にしたトピックはこんなところだ。
結局、まだまだ奥様の足元にも届いていないことはクリアに自覚しているが、しかしこうした経験が英会話のスキルアップへの思いを強くしてくれている。

そして、今新たに、リスニング強化のために、電子辞書にあるＴＯＥＩＣ問題集から毎日 3 題ずつリスニング・質問回答するルーチンを始めた。
さらに、9 月から和歌山市の市民図書館が定期的に開催している「Small Talk in English」という少人数で英会話を愉しむ会への参加もトライしている。特に後者はネイティブとではないものの、対面会話するということの刺激が「英会話現場力」を高めてくれるものと期待している。
勿論そこには 30 代前後のトテメンシャンなユングフラウがいて、そちらの方も刺激的であることが背中を押す。

というわけで、これからが私の真の意味での「***英会話　事始め***」となる・・はずである。